

バスの車種と歴史 ～UJ・富士重・西工編～

津端 和希 監物 諒

ボディとシャーシ

バスをはじめとするトラックなどの大型車は、「シャーシ」呼ばれる部分と「ボディ」と呼ばれる部分で分かれています。このシャーシとはエンジンや車輪などの足回り部品のみを指し、ボディとはその上に乗る座席などを含む箱のことを指します。これらの2つの部分を組み合わせてバスやトラックは製品となるのです。

現在のバスは1980年頃から製造されている「スケルトンボディ」と呼ばれる製法のもので、それ以前の車体は戦後から使われていた「モノコックボディ」と呼ばれる製法のものでした。別で取り上げている「キュービック」や「ブルーリボン」、「エアロスター」などの各車種は、どれもそれぞれのメーカーで開発されたスケルトンボディの車両です。

シャーシメーカーとコーチビルダー

バスメーカーは、現在はいすゞ、日野、三菱ふそうの3社のそれぞれの関連会社でシャーシとボディの製造をおこなっていますが、かつてはシャーシとボディで製造メーカーが分かれています。シャーシ製造はいすゞ、日野、三菱ふそう、日産ディーゼルの4社で、ボディ製造はアイケーコーチ、日野車体工業、新呉羽自動車工業、三菱自動車工業、富士重工業、西日本車体工業などの複数のメーカーでおこなわれていましたが、その後コーチビルダーは再編され、アイケーコーチはいすゞに、日野車体工業は日野に、新呉羽と三菱は三菱ふそうに、それぞれ指定メーカーから子会社にされ、シャーシメーカーとコーチビルダーの関係は強化され現在に至ります。

日産ディーゼル

日産ディーゼルの路線バスは、大型車も中型車も「スペースランナー」という商品名で販売されていました。この会社の3社と異なる大きな特徴は、自社でバスのボディ製造を行っていないため「西日本車体工業」もしくは「富士重工業」でボディを載せて販売をしていたことです。また、中型ロングと呼ばれる車種の先駆けとなる「JP」、低床小型車としてコミュニティバス需要に対応した「RN」、国内4メーカーの中でいち早く新長期規制に対応した「スペースランナー RA」などバス業界をけん引していく車両を販売していましたが、2012年に日産ディーゼルがバス事業から撤退したため現在はバスの製造は行われておりません。

富士重工業

富士重工業の前身は中島飛行機という戦闘機メーカーで、戦後に自動車製造に転換しスクーターや乗用車、鉄道車両、バスボディなどを手掛けていました。現在は社名をスバルに改めています。富士重が行っていたバスボディ架装は、いすゞ、日野、三菱ふそう、日産ディーゼルの国内4メーカーのシャーシに加え、つくば科学万博や幕張新都心で運行していたボルボ製の連接バスでも採用されました。富士重製の路線バスのボディは一般的に大型車のものを「5E」や「7E」、中型車のものを「6E」や「8E」と呼びますが、正式名称はそれぞれ「15型E」「17型E」「16型E」「18型E」といいます。

西日本車体工業

西日本車体工業は、親会社に大手私鉄の西日本鉄道を持ち、主に西日本地域向けにいすゞ、日野、三菱ふそう、日産ディーゼルのバスボディの製造を行っていた会社です。富士重のバスボディ事業撤退後は日産ディーゼルからのバスボディ製造を全て引き受けていましたが、日産ディーゼルの撤退後は需要が見込めなくなってしまったため、会社を解散してしまいました。西工製の路線バスのボディは、昭和58年に登場した「58MC」と呼ばれるものと、1996年に登場した「96MC」と呼ばれるもの2種類の他に、日産ディーゼルの中型車向けに開発された「日デオリジナル」と呼ばれるボディが存在していました。

参考資料

西日本車体資料館 (2018)

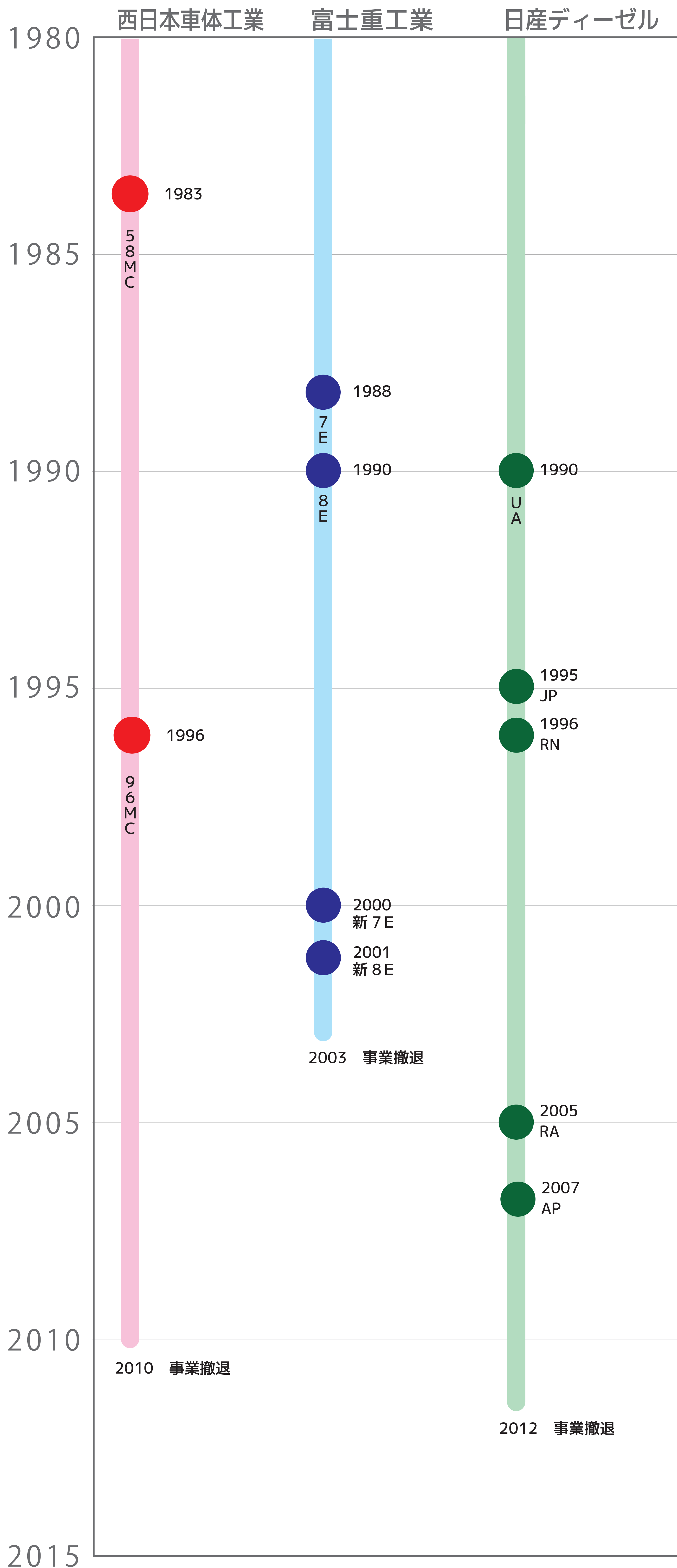
<https://nskbodysmuseum.amebaownd.com>

カナちゃん号 HP (2018)

<http://kanachango.web.fc2.com/d-menu.htm>

富士重工業路線バスのページ (2018)

<http://www16.plala.or.jp/caw99100/FHibus/index.html>



川越観光自動車 2027号車
日産ディーゼル KK-RM252GAN (西工)



国際十王交通 2035号車
いすゞ U-LV524L (富士重)



国際十王交通 2107号車
いすゞ KC-LR333J (富士重)